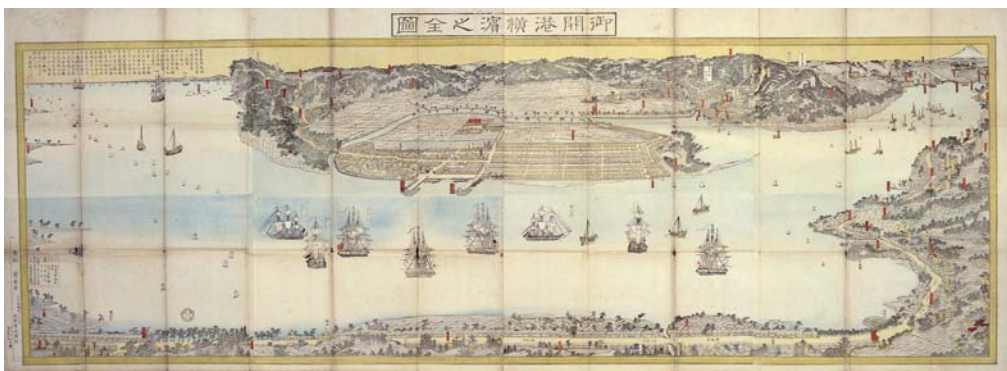


# 横浜とゆかりのある幕末・明治の企業家の研究

尾 川 信 之

## 1. はじめに



絵図1 御開港横浜之全図（横浜開港資料館所蔵）

ここに1860年に五雲亭貞秀が開港間もない横浜港と、東海道や神奈川湊を描いた「御開港横浜之全図」がある（絵図1）。これが描かれた1860年は1859年の横浜開港の翌年となる。この1枚の絵図には横浜開港の歴史が刻まれている。

画面の中央に波止場が描かれ、そこから2つの突堤が海に向かって設けられている。後にイギリス波止場と呼ばれる荷役のための施設である。沖合に大型船が描かれているが、この頃大型船は直接接岸できず、荷役は小型船を介して行われていた。実は中央の波止場となった横浜開港場の少し奥から中央奥の丘陵まで広がる平坦な地は元々入海であった。江戸の石材商・材木商であった吉田勘兵衛はその入海の新田開発を幕府に願い出て許可され、1656年から1667年の11年もの歳月を費やし吉田新田を完成させたのである。続いて文化年間（1804年～1818年）に横浜村村民が吉田新田の先の南一角に横浜新田を完成させた。そして、その半世紀後の1856年に三河国の商人であった太田屋佐兵衛が横浜新田に隣接して太田屋新田を完成させた。その後わずか3年の間に横浜新田と太田屋新田の周辺も埋め立てられ、1859年に2つの新田と新たに埋められた土地一帯の東半分が外国人居留地、西半分が日本人街に分けられ横浜港が開港したのである。

もう一度絵図に戻って、吉田新田、横浜新田、太田屋新田が海のころを想像していただきたい。丘陵の裾野の狭い土地で塩田や農業を営み、また漁業を営んでいる村々があった。そこは東

(12)

海道からは海を隔てた所で、街道にある茶屋から眺める江戸湾の景色の一部でしかなかった。そのような場所が一躍世界との玄関口となり、近代日本の幕開けの表舞台に登場したのである。

横浜港は明治政府の国家構築構想といった高所への影響もあったが、直接的、あるいは異国人を通じた間接的な形で庶民の生活、文化など日々の暮らしへの影響も与えたに違いない。そして、庶民の生活や文化の西欧化を推進する企業家も生んでいった。本稿ではまず横浜開港へと導いた修好通商条約締結から開港までを追い、その上で明治以降の近代日本の産業を牽引した企業家と横浜港の関わりをたどっていく。

## 2. 黒船来航から横浜開港までの動き

### (1) 横浜港を望む一体の像

横浜港を望む小高い丘に掃部山公園がある。この公園から横浜港を見下ろすように建っている一体の像がある。この像は開国を断行し、その結果として寒村を国際貿易都市横浜へと導いた井伊直弼の像である（写真1）。この像は井伊直弼の功績を称え、旧彦根藩有志によって明治時代に建立されたものである。なお、現在の像は、太平洋戦争中の金属回収令により没収され、1954年に再建されたものである。また、いち早く横浜開港を唱えた松代藩の兵法家、佐久間象山の顕彰碑も横浜の野毛山公園にある（写真2）。

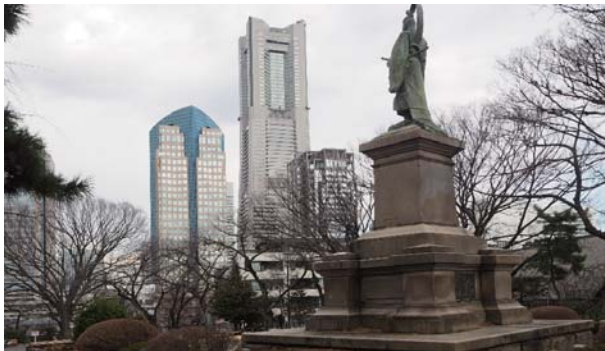


写真1 横浜ランドマークタワーを望む井伊直弼像



写真2 佐久間象山顕彰碑

### (2) 和親条約、修好通商条約の締結

19世紀になると日本沿岸に西欧諸国の黒船が現れるようになってきた。その背景には18世紀後半から19世紀の前半にかけてのイギリスの産業革命や、アメリカの捕鯨領域の太平洋への拡大などがあつた。その黒船が江戸湾にも現れるのも時間の問題となりつつあつた。そして、幕府は江戸湾での台場（砲台）構築はもとより、諸藩に対しても防衛のための台場を築くよう命じていった。なお、先に示した絵図1の右側に神奈川台場も描かれている。

1853年ペリー提督率いるアメリカ東インド艦隊の軍艦4隻の浦賀沖出現からわずか1年たら

ずの翌 1854 年に和親条約を締結し、その後次々と西欧各国と和親条約を結んでいった。その後、アメリカ総領事ハリスが赴任し修好通商条約の締結を迫ってきた。日米修好通商条約の締結に向け、老中の堀田正睦は天皇に勅許を求めるが、許しは得られなかった。そして、1858 年 4 月に彦根藩主井伊直弼が大老に就任し、堀田は失脚した。幕府至上主義者であり、現実主義者でもあった井伊直弼は欧米列強と戦っても勝算はない以上、条約締結はやむなしと腹をくくった。井伊は天皇勅許に努めたが、それが得られないまま 1858 年 6 月 19 日、日米修好通商条約の締結を決め、翌年開港しなければならなくなった。条約には「神奈川」とあり、神奈川だと交通の便もよくハリスは納得していた。しかし、いざ実行するとなると、幕府は様々な懸念を抱くことになる。特に主要街道の東海道は通行者も多く、その妨げになるとともに、攘夷論者もいる中で外国人を襲撃する者が出ることを恐れた。そこで、幕府は神奈川の名のもとに横浜を主張したが、ハリスは譲らず平行線が続いた。結局、開港まで 3 か月となって、幕府は強引に横浜開港の建設計画を推し進めた。これによって、この神奈川湊、そして神奈川宿が開港場となることはなくなった。

### (3) 桜田門外の変

条約締結は孝明天皇の逆鱗に触れることになり、幕府対朝廷・攘夷派の対立が深まっていった。井伊直弼はこれに対して強硬な姿勢をとり、容赦なく処罰をしていった。これが安政の大獄と呼ばれるものである。

井伊直弼のこの弾圧に不満を募らせる者も少なくなく、その結果として起こったのが、横浜開港翌年の 1860 年 3 月 3 日の桜田門外の変である。水戸藩脱藩浪士 17 人、薩摩藩士 1 人の計 18 人が江戸城の桜田門外で井伊直弼を暗殺した（絵図 2）。この変の以降、幕府の威信は急速に弱まり、大政奉還へと進んでいくことになる。



絵図 2 桜田門外の変図（茨城県立図書館所蔵）

### (4) 領事館

横浜開港に際して、各国は領事館を開くことになる。幕府が恐れたことは日本人、特に攘夷派と外国人との間のトラブルである。幕府は主要道の東海道から離れた横浜に領事館を設けることを薦めたが、各国は東海道から離れた当時不便な横浜よりも、東海道の神奈川宿に領事館を開い

(14)

ていった。そこで領事館として利用されたのが、神奈川宿にある寺院であった。

慶運寺はフランス領事館、浄瀧寺はイギリス領事館、本覚寺はアメリカ領事館として使われた(写真3)。また、アメリカの宣教師たちも来日した。かれらの宿舎として、成仏寺が使われた(写真3)。成仏寺で暮らした宣教師の中にヘボンという宣教師がいた。かれは医師であり、宣教師で、後にヘボン式ローマ字を作った人物である。その後横浜に商館などが建てられ急速に発展していくと、各国の領事館は横浜に移っていった。

浄瀧寺



慶運寺



本覚寺



成仏寺



写真3 当時領事館などに使用された寺院の現在

### 3. 日本実業界の祖 洪沢栄一と五代友厚

#### (1) 洪沢栄一

##### ① 出生から尊王攘夷運動傾倒まで

洪沢栄一は1840年、武蔵国榛沢郡血洗島村（現埼玉県深谷市血洗島）の農家に生まれた。父の一郎右衛門は麦作や養蚕に加え藍葉を自ら生産するとともに、近隣からも仕入れて藍玉を製造して紺屋に販売をしていた。そのような中、栄一は跡取りとして育てられていた。

1858年に日米修好通商条約が結ばれ、翌年横浜が開港されることになった。その頃から、尊王攘夷派が運動を展開するようになり、19歳の栄一も尊王攘夷運動に傾倒していった。やがて、家業にも身が入らなくなり、父親を説得して1861年に2か月間ほど江戸へ遊学に出ることにした。その後、郷里に戻るも1863年、23歳の時に再び江戸に向かった。そして、高崎城を乗り取り、横浜の外国人居留地の焼討を計画することになる。京都から戻った尾高長七郎は京都での政変を論じ、栄一に無駄死になると計画中止を訴えた。激論の末、栄一は長七郎の言うことが道理にかなっていると認め、計画を中止した。しかし、官憲に捕縛されるおそれもあるため、栄一は京都に向かうことにした。

## ②幕臣になる

尊王攘夷論を唱えていた栄一が幕臣に転換をしていくこととなる。そして、これがその後の人生の大きな転機となっていった。

京都までの道中で身を守るために、一橋慶喜の側近の平岡円四郎から、平岡の家来名義を許してもらうことができた。そして、無事に京都に着いた栄一は攘夷運動のための情報収集などを行った。翌年、栄一らは幕政批判を書いた書簡を所持していた同志尾高長七郎が捕縛されたことを知った。そして、一橋家に栄一の紹介状が届いていることを平岡から知らされることになる。ここで平岡は栄一に志を変え、一橋家の家来になるよう説得した。1864年2月、栄一は一橋家に仕える決心をした。

仕えて仕事をしだすと、栄一は企画や創意工夫の力量を発揮し、一橋家の兵力増強、財政強化など、頭角を現していった。そのような日々の中、1866年7月、14代将軍徳川家茂が死去し、一橋慶喜が15代将軍に就くことになった。それにより、栄一も幕府に移り幕臣となったのである。

## ③渡欧

1867年慶喜の弟、昭武をパリ万国博覧会に派遣し、引き続きフランス留学をさせることになった。栄一は経理・庶務全般を担当する役で随行することになり、1867年1月昭武一行は横浜港を出航した。パリ到着後、歓迎行事、博覧会の視察に加え、様々な公共施設も視察してまわった。博覧会后、一行はスイス、オランダ、ベルギー、イタリア、イギリスも歴訪した。ヨーロッパ各国を歴訪する中で、栄一の好奇心は大いに刺激されたにちがいない。ところが1867年10月に日本では大政奉還が起こった。その後、鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍が敗れ、徳川慶喜に処分が下されることになる。栄一ら一行は日本の様子をフランスの新聞や、日本から届く書簡からしか伺うことができなかった。その後、1868年11月、昭武や栄一らの一行は横浜港に到着、帰国の途に着いた。

## ④静岡生活

栄一が帰国した日本では明治政府が樹立され、江戸は東京となり、日本が新たな姿に向かっていくことを実感せざるをえなかった。徳川慶喜は静岡の宝台院に謹慎しており、栄一は恩遇を受けた慶喜のいる地で一生を送ることを決心する。静岡に向かい慶喜に拝謁し、渡欧中の様子や昭武の伝言を伝えた。もし慶喜からの返書があれば、水戸の昭武のもとに行く必要があるため旅宿に留まっていたが、慶喜からの返書が無かった。そのような中、静岡藩庁から出頭の達しがあり出頭すると、静岡藩の勘定組頭を命じられた。これは慶喜の栄一への配慮によるものであった。水戸藩から栄一の身分について掛け合いがきており、もし慶喜が返書を出して栄一を水戸に向かわせたら、栄一に危害が及ぶおそれがあると考えたのである。しかし、栄一は静岡藩の勘定組頭に就くことを辞退した。そして、慶喜のいる静岡で農業か商業に従事して暮らしていくことにしたのである。

明治政府は新紙幣の全国流通を促進させるため、藩の石高に応じて紙幣を貸し付けることにし



(16)

た。栄一はこの石高拝借を活用し、欧州で学んだ合本組織（株式組織）による銀行と商社を兼ね備えた商法会所設立の企画を、藩の勘定頭平岡準蔵に提案した。平岡はそれを認め、1869年紺屋町に静岡商法会所が設立され、渋沢は頭取となった。東京の深川に東京支店である東京会所も置き、海運も活用して広域な取引を展開していった。

#### ⑤明治政府役人になる

栄一は静岡商法会所経営に一生を捧げようと思っていた。しかし、それは新政府が許さなかった。大隈重信は新しい日本を建設するために広く賢才を求めており、栄一も賢才のそのひとりだと説得され、政府に入ることになった。

栄一は1869年から1873年に官職を辞任するまでの間に、次のような役職を歴任している。主なものは、1869年民部省租税正、1871年大蔵大丞、1872年大蔵少輔事務取扱で国立銀行条例など条例や制度の立案に関わった。1873年大蔵省への政費増給要求を巡って、その拒絶を主張する大蔵大輔である井上馨は、大隈重信と対立した。そして、井上馨は大蔵省を辞職することになり、栄一も井上と一緒に辞職をしてしまった。

#### ⑥実業家渋沢栄一

おおよそ4年間の官職生活で栄一は、商人に官尊民卑意識が染みついていると感じていた。東京や大阪の商人たちには江戸時代の身分制度の意識が残っており、役人に平身低頭し、自分たちで新しい商業の時代を築こうという気概が見られなかった。栄一は自ら商業に身を投じ、日本の商業を発展させたいと官職時代に思っていた。そして、いよいよ栄一がそれを実行できる時となったのである。



写真4 みずほ銀行兜町支店（第一国立銀行跡地）

民間の立場になっても、栄一は官職時代に関わっていた第一国立銀行設立準備を支援していた。そして、1873年第一国立銀行が設立され、栄一は総監役に就くことになり、その後頭取となっていく。なお、第一国立銀行は「国立」と付いているが、民間銀行である。栄一が大蔵省時代、銀行条例の起草担当者であったとき、米国のナショナルバンクをモデルとしていたので、それを日本語訳して「国立銀行」としたのである。第一国立銀行を近代的経営の見本とするため、江戸時代の商家では経営状況の公開はしていなかったが、栄一は銀行の経営状況を株主に公開することを始めた。また、経営状況の公開方法も西洋式簿記方式で行うことにした。その後も栄一は他の国立銀行設立の指導・支援をし、それらは第十六国立銀行、第十九国立銀行、第二十国立銀行、第二十三国立銀行、第五十九国立銀行、第六十九国立銀行、第七十七国立銀行などである。なお、栄一が最初に設立し総監役を務めた第一国立銀行は、その後合併を繰り返して現在のみずほ銀行に至っている（写真4）。

栄一は大蔵省時代に、政府保護の下で洋紙製造事業の設立にも奔走した。先に昭武に随行して

渡欧した際、新聞の普及など印刷物の普及を目にした。そして、これからの日本を築いていくには、人々の知識を高める必要があり、そのためには書籍や新聞などを安価で、かつ大量に供給できなければならないと考えたのである。また、国立銀行が発行する紙幣はアメリカに発注される予定だったが、いずれは国内で製造することも想定されていた。その他に切手や印紙も、需要が増すことも考えられた。しかし、このような大規模工場を建設するにしても、洋紙の普及には時間を要する可能性もあり、民間のみではリスクが高いものだった。そこで、渋沢は政府から洋紙の受注の特権的に請け負う政府保護の下で、渡欧時に見聞した合本組織（株式組織）で洋紙会社を設立することを考え出した。1873年2月政府より洋紙会社製造会社設立が許可され、栄一は三井組、小野組、島田組を説得し、社名「抄紙会社」を設立した。この抄紙会社は後の王子製紙となっていくことになる。

第一国立銀行、抄紙会社以降も栄一は多くの会社に関わっていく。その数は500社近くに及んでいる。当時と社名は変わっている会社もあるが、ごく一部を紹介すると現在の東洋紡績、日本郵船、帝国ホテル、アサヒビール、サッポロビール、清水建設などである。

栄一は1909年に第一銀行と東京貯蓄銀行を除く会社の役職を退いた。1916年にはそれらも退き、実業界から完全に引退をした。

横浜の外国人居留地の焼討を企てた尊王攘夷派の栄一が幕臣となり、慶喜の弟、昭武に随行して横浜港から渡欧し、そして横浜港に帰国した。やがて外国での見聞を基に近代日本の産業の礎を築く実業家へと歩いていった。横浜とは栄一の人生において対称的な思いを抱かせた地と言えるのではないだろうか。

## (2) 五代友厚

### ①生麦事件

五代は藩命で江戸に向かい、江戸到着と入れ違いに薩摩藩主の父、島津久光の一行は京都に向かって出発していた。その途中4人のイギリス人と遭遇し、かれらは久光の行列を妨げてしまった。そして、薩摩藩士に斬りつけられた4人は、横浜の外国人居留地を目指して逃げたが、リチャードソンは途中で絶命した。残り3人は滝の橋を渡り、マーシャルとクラークの2人は神奈川宿にあるアメリカ領事館であった本覚寺に逃げ込み、近くの成仏寺で暮らしていた宣教医ヘボンの治療を受けた。残りの1人ボロデール夫人は無傷で、横浜の居留地まで逃げ帰ることができた。1862年に起きたこの事件を生麦事件と言い、やがて薩英戦争を引き起こすことになる。

### ②薩英戦争

イギリスは幕府に対して賠償と犯人引き渡しを要求した。幕府は公式謝罪と賠償10万ポンドの支払いに応じたが、薩摩藩は拒否した。そこで、イギリス艦隊は鹿児島湾に侵入し、賠償と犯人の処刑を求めた。交渉が進まない中、イギリス艦隊は薩摩の3隻の汽船を拿捕して捕虜をとった。その捕虜の中に五代友厚と松木弘安がいた。イギリス艦隊と薩摩藩の砲戦が始まり、双方

(18)

に大きな被害が出ることになった。やがて、イギリス艦隊は横浜に帰り、英国提督クーパーのはからいで五代、松木らは横浜で釈放された。しかし、五代はすぐに薩摩に戻れる状況ではなかった。拿捕された汽船を失った責任、おめおめと捕虜になったことなどが理由である。その後、藩への帰参が許された。

薩英戦争から3か月後、イギリスと薩摩藩の講話交渉が横浜のイギリス公使館で行われた。イギリス代理公使ジョン・ニールと薩摩藩士重野厚之丞による交渉が始まった。ニールは犯人の処刑と賠償金25,000ポンドを要求した。当初、互いの主張を譲らなかったが、交渉3日目に重野は賠償金の支払いに応じた。この賠償金は幕府から借金で賄うこととした。

重野の交渉力はそこからが圧巻であった。賠償金を支払う条件として、軍艦を購入したいということでイギリスに斡旋を依頼したのである。つまり、講話交渉を通商交渉へと展開していったのである。通商はイギリスが望むところで、ニールにとって賠償金を取り、かつ通商を進めたという面子のたつものであったはずである。薩摩藩にとっても最先端の軍艦を手に入れることができ、さらに薩摩藩の若者のイギリス留学も認めさせたのである。薩摩藩は1865年にイギリス人貿易商グラバーの用意した蒸気船オースタライエン号で、新納久脩、五代友厚、松木弘安らの使節と、15人の留学生をイギリスに派遣した。この使節団で渡欧中、五代は紡績機械、騎兵銃、大砲隊小銃などを買い入れている。ほとんどが武器などの軍需品だったが、そこに紡績機械が入っていることは、その後の日本の近代産業の方向性を見通しているようにも思われる。

### ③明治政府役人から民間経済人へ

明治政府が樹立されると、五代は参与職外国事務掛となった。1868年には外国事務局判事となり、大阪で勤務することになった。ここから五代と大阪の関わりが始まることになる。開国により5つの港を開講したが、外国商人たちは江戸と大阪の経済的価値を見抜き、江戸と大阪の開港を強く求めてきたのである。そういう過程を経て、新政府は明治元年に大阪の開港に踏み切った。大阪での貿易事務を担う川口運上所(税関)には五代友厚が責任者として就くことになった。ここで五代は大阪商人との関係を構築していくことになる。

1869年5月に五代に会計官権判事として横浜への転勤命令が出た。大阪商人たちは五代の横浜転勤を阻止するために、政府に嘆願書を提出した。しかし、政府はそれを聞き入れなかったため、今度は五代自身に大阪に留まるよう説得した。五代は横浜で2か月間勤めた後、政府を辞す決断をした。また、五代は当時の財政運営を批判し、自らの財政改革を提言するなどしていた。そうした姿勢に対して郷里の薩摩で五代への批判があった。こうしたことも官を辞めた理由だと言われている。

五代が民間人として歩み始めた頃、旧幕藩時代の金銀銭貨や藩札、太政官札などが入り乱れており、幣制は混乱をしていた。また、それが外交上も問題となっていた。明治政府は1871年新貨条例を制定し、金1.5gを1円とする新貨幣を発行することとした貨幣制度を確立した。そうした中、五代は諸貨幣を分析して地金を取り出し、造幣寮に収めることを目的とした金銀分析所を設立した。その後、鉱山経営をはじめ、数々の事業を手掛けていくことになっていく。



### (3) 東の渋沢、西の五代

1853年のペリー来航から始まった海外からの開国圧力と、それに伴う内乱へと進む幕末期、そして大政奉還に向かい明治政府の樹立、文明開化へと大きな社会経済の変革が日本を襲っていた。そのような中において、西洋に目を向け、富国強兵、殖産興業といった国主導の産業育成とともに、民間人として立ち上がり、革新的な企業活動に乗り出す実業家も登場した。その代表格が、東の渋沢栄一、西の五代友厚ではないだろうか。

二人の共通点はその生涯を通じて重なる点が多々あったように思われる。渋沢栄一は農民出身で攘夷思想の持ち主であった。五代友厚も攘夷思想の薩摩藩士であることから自身も攘夷思想の持ち主だったと思われる。その二人が後に開国派に転じ、幕末に海外経験をし、明治政府での職を務めて、それを辞し民間に下り実業家として歩んでいる。

また二人は産業の育成にも貢献している。現在の商工会議所の前身の商法会議所を設立し、渋沢栄一は東京商法会議所の、五代友厚は大阪商法会議所の初代会頭を務めている。さらに、渋沢栄一と五代友厚は、それぞれ東京株式取引所（現、東京証券取引所）（写真5）、大阪株式取引所（現、大阪取引所）（写真6）の創設にも尽力している。

このように二人には多くの共通点があるが、大きく異なるのは亡くなった年齢である。渋沢栄一は91歳、五代友厚は49歳で亡くなった。五代友厚は夢半で去ってしまったのかもしれない。

この日本実業界の祖である二人にとって「横浜」は攘夷派から開国派へと大きく転換させ、さらに実業家へと導いた「場」であったと言えよう。渋沢は横浜外国人居留地の焼討を断念したからこそ幕臣となり、開国派へとなっていった。そして焼討を計画した横浜から慶喜の弟昭武に随行して渡欧し、後に実業家として歩みだす際の見識を身につけていった。五代は薩英戦争でイギリスに拿捕され横浜で開放された。この薩英戦争が薩摩藩、そして藩士たちが開国に向かって歩みだすきっかけをつくった。薩英戦争のきっかけとなった生麦事件も横浜に近接した所で起こった。そして、五代が政府を辞し、大阪で実業家として歩みだす決断を下したのが横浜である。この開港間もない横浜は渋沢、五代のほかにも近代日本の産業を牽引していく実業家を誕生させて



写真5 東京証券取引所



写真6 大阪取引所と五代友厚像

(20)

いくことになる。

#### 4. 現代につながる企業の誕生 ～清水建設と日本郵船～

##### (1) 清水喜助

###### ①清水屋の誕生

清水喜助は1783年に現在の富山県上新川郡で、農家の子として生まれた。子どもの頃から彫刻にたけ、やがて農耕の合間で行う大工職人としての腕もあげていった。20歳になろうかという頃に、喜助は志を抱いて江戸に向かうが、途中で日光東照宮の修営工事に加わり働くことになった。宇都宮でしばらく過ごし、その間に結婚もした。そして、喜助夫婦は江戸に出て、21歳の時に神田鍛冶町で大工を開業した。その後、神田新石町に屋号を「清水屋」とする店を開き、弟子もとり棟梁となった。喜助は焼失した江戸城西の丸の再建工事に参加することになった。その縁で井伊直弼が藩主の彦根藩御用達となった。

###### ②横浜進出

1858年6月19日に日米修好通商条約が締結され、その翌年には横浜、長崎、函館が開港されることになった。幕府は神奈川湊ではなく、横浜村を開港地とすることを決定し、その整備に動き出した。当時は日本の一般人が異国人と接する機会などがなかったことは、容易に想像がつく。また、黒船から放たれる大砲の音に驚かされたことなどから、異国人は恐ろしいという先入観を持っていたかもしれない。横浜にビジネスチャンスがあったとしても、万一のリスクを考えると尻込みをしても仕方ないかもしれない。

喜助は井伊直弼から依頼された横浜の外国奉行所の建設を請け負うことにした。そして、横浜に進出するが、最初から意気揚々と進出を決断したかは不明である。御用達先の井伊が喜助に横浜での幕府御用工事を請け負うように強いたとしてもおかしくはない。これについては定かではないが、いずれにせよ、喜助は1859年に横浜に進出をした。そのようにして、喜助に限らず横浜で西洋建築に携わった日本の大工たちは、近代建築の施工技術を習得していったのである。

###### ③日本最初の和洋折衷建築、築地ホテルの建設

各国と修好通商条約が結ばれたが、幕府は江戸と大阪に外国人の居留を許可する開市は延期していた。それは攘夷の風潮が治まり、状況が安定するまで待ちたかったからである。その後、1867年に江戸の開市が決まり、外国人専用のホテルが必要となった。

そして、アメリカ人プリジェンスの基本設計の下、初代喜助の後を継いだ二代喜助が実施設計と施工を請負い、1868年に日本の最初の和洋折衷建築となる通称、築地ホテルが完成した(写真7)。二代喜助はこのホテルの経営にもあたった。しかし、残念ながら築地ホテルは完成の3年半後の1872年に焼失してしまった。



写真7 築地ホテル（横浜開港資料館所蔵）

#### ④ 渋沢栄一と清水建設

二代喜助は1872年に日本で最初の銀行である第一国立銀行の設計、施工も手掛けている（写真8）。この国立銀行の設立には、当時大蔵省で紙幣頭・大蔵大丞に就いていた渋沢栄一が国立銀行条例立案などで関わっていた。その後、渋沢栄一は第一国立銀行の総監役、頭取を務めている。これが渋沢栄一との運命的な出会となった。

二代喜助のあと、三代満之助が清水組を継いだ。ところがこの満之助が急逝してしまった。そこで、長男の喜三郎が四代当主として満之助を襲名するが、まだ8歳であった。未亡人のムメが後見人となるが、清水組を守っていくには困難も考えられた。そのような中、ムメは1887年に渋沢栄一に清水組の相談役を引き受けてもらっている。

また、渋沢栄一は二代喜助の卓越した技量を見て、私邸も清水組に依頼している。東京の王子の旧渋沢邸にある渋沢史料館とその敷地を訪ねると、渋沢栄一の喜寿を祝って、現在の清水建設



写真8 第一国立銀行（横浜開港資料館所蔵）

(22)

より贈られた晩香廬という建物が残っている（写真9）。晩香廬は1917年竣工の木造建築の洋風茶室である。

#### ⑤清水建設と横浜

初代喜助の横浜港進出の決心があったからこそ洋風建築技術を習得し、その後の日本の近代建築を牽引することができた。そして、当時日本を代表する築地ホテルや第一国立銀行の建設に従事し、その過程で渋沢栄一と出会っていく。この出会いが清水建設のさらなる発展へと導いていくことになる。横浜は今日の清水建設の礎を築いた地と言っても過言ではないだろう。



写真9 旧渋沢邸にある晩香廬

## (2) 岩崎彌太郎

### ①黒船来航までの日本の海運

日本は周囲を海で囲まれ、歴史を遡れば大陸との人、モノ、文化、情報などの交流は船を介して行われてきた。歴史で習った遣隋使や遣唐使の派遣も船である。また、貿易という経済活動も古くから大陸と行われ、その輸送手段も船である。しかし、江戸時代の鎖国により、海外との交易は制限されることになり、海運も国内各地を結ぶ沿岸輸送が中心となっていった。

日本の海運が息を吹き返すきっかけは、1853年の開国を求めたペリー来航である。そして、欧米国と和親条約や通商条約などの条約が締結されていき、横浜、長崎をはじめ、函館、新潟、神戸が開港され、海外との貿易の拠点となっていった。しかし、貿易物資の輸送手段の海上輸送は、蒸気船を有するアメリカやイギリスの船会社にかなわないばかりか、沿岸輸送までこれらの船会社に独占されようとする状況であった。

### ②岩崎彌太郎による民間海運会社の設立

鎖国をしてきた日本の海上輸送手段は和船、帆船で、海外の船会社との競争力の劣勢は歴然であった。このような幕末の状況から危機感を持った明治政府は1870年に半官半民の廻漕会社を設立した。しかし、廻漕会社の経営は不振で、その後回漕取扱所、日本国郵便蒸気船会社と名称、組織の改編を行っていった。一方で、民間では土佐藩が経営していた廻漕問屋から独立して海運を営む九十九商会を、1871年に岩崎彌太郎が継承した。九十九商会は三川商会、三菱商会、三菱汽船会社、郵便汽船三菱会社へと発展していった。

その発展の原動力は1874年に三菱商会が台湾出兵の軍事輸送を政府から引き受けたことによるものであった。一方で半官半民の日本国郵便蒸気船会社は郵便汽船三菱会社との競争に破れ、解散した。郵便汽船三菱会社は1875年2月に政府の命令により横浜-上海の定期航路を開航し、政府御用達となった。これは日本初の海外定期航路である。

### ③ 渋沢栄一と岩崎彌太郎～日本海運業界の再編の歴史～

その後、政府の勢力構図が変わると日本の海運界に君臨する郵便汽船三菱会社に対する政府、民間からの抑圧が始まった。この独占状態を良しとしない渋沢栄一、井上薫、品川彌二郎、益田孝らが半官半民の共同運輸会社を設立した。この2社は値引き競争、積み荷の取り合いなど熾烈な競争を繰り広げていった。もはや消耗戦で、このままでは日本の海運業の衰退をまねく状況となり、政府の西郷従道農商務卿が仲介に乗り出し協定を結ばせた。しかし、その協定破りが常態化し、1885年に岩崎彌太郎の死去を契機に政府が仲介に乗り出し、その年両社は合併して日本郵船が誕生した。

その後の歴史の中で、多くの日本の海軍会社が誕生していった。そして、海運会社は世界情勢や国内情勢の影響、業界内の過当競争などで、1960年代に入る頃には低迷に陥っていった。そこで、1964年に政府は海運業を6グループにする英断を下した。この6グループもその後の合併などを経て、現在の日本の海運会社は、日本郵船、商船三井、川崎汽船となっている。

### ④ 半年だけの横浜本社

日本郵船の誕生の翌年に横浜支社を本社に格上げする話がもちあがった。設立時の本社は東京の茅場町にあったが、海運の起点となる横浜が本社を置くのにふさわしいと考えたのかもしれない。しかし、予想より不便だと理由で1886年10月1日～1887年4月2日の短命で横浜本社は閉じたのである。一方、イギリス人建築家に横浜本社設計を依頼し、レンガ造りの立派な建物が完成したが、本社として使用されず横浜支社として使われた。そのような立派な横浜支社も1923年の関東大震災で崩れてしまった。その後1936年にルネッサンス様式の横浜支社が同じ場所に完成した。



写真 10 日本郵船横浜支店

この1936年に完成した建物は横浜大空襲を逃れ、戦後は米軍に接収されたが1954年7月に日本郵船に返還された。現在も横浜支店として使用されているが、1階部分は日本郵船歴史博物館として一般に公開されている（写真10）。

### ⑤ 日本郵船と横浜

日本郵船の誕生を岩崎彌太郎はどう思うだろうか。彌太郎の死を待っていたとばかりに政府が動き、彌太郎が築き上げた民間の郵便汽船三菱会社と半官半民の共同運輸が合併して日本郵船が誕生した。「三菱」という名は消えることになった。横浜開港により、本格的な海外との貿易が行われるようになった。1861年にそれまでの大船建造禁止令が撤廃され、民間に大船建造、外国船購入が許可された。しかし、民のみでは資金力が弱く、政府が主導して半官半民の回漕会社を起こすが、そこに民で対抗したのが岩崎彌太郎である。合併後横浜本社が浮上することから、



(24)

その舞台の主戦場が横浜であったと推察される。横浜は彌太郎の闘志を燃やさせ、今日の三菱グループへとつながる原点となった地ではないだろうか。

## 5. あとがき

「横浜とゆかりのある幕末・明治の企業家の研究」のテーマで本稿を執筆していく中で、横浜開港に導ききっかけとなった新田開発にも江戸時代の企業家が関わっていたことに気づくことになった。その二人とは吉田新田を開発した吉田勘兵衛と、太田屋新田を開発した太田屋佐兵衛である。吉田勘兵衛は摂津国能勢（現大阪府豊能郡能勢町）に生まれ、24歳で江戸に出て木材と石材の商売を始め豪商となった人物と言われている。太田屋左兵衛は三河国碧海郡川島村（現愛知県安城市）出身の商人だったようである。横浜開港を「企業家」という観点から研究することにより、江戸時代の企業家による新田開発があったからこそ横浜港の誕生となり、その横浜が近代日本の産業を牽引していくことになる企業家たちに多大なる影響を与えたという時代の流れを浮き彫りにすることができた。横浜開港を「企業家」という観点から研究することにより、企業家の挑戦が次の時代の企業家たちを誕生させる場を築き、その連続が産業を発展へと導くことが示唆された。

### 参考文献

- 犬塚研哉（日本郵船株式会社横浜支店長）横浜中法人会インタビュー 2007年4月  
岩崎彌太郎年表 三菱グループホームページ <https://www.mitsubishi.com/j/history/series/yataro/>  
海老名熱実（2010）「岩崎弥太郎」横浜 Vol.29 12-13  
岡田晃（2016）「五代友厚に学ぶ企業家精神と日本経済再生のヒント」月刊資本市場 No.370 42-49  
桑畑正樹（2016）『五代友厚 明治産業維新を始めた武士』高城書房  
斎藤多喜夫（2010）「五雲亭貞秀」横浜 Vol.29 28-29  
斎藤多喜夫（2017）『幕末・明治の横浜 西洋文化事始め』明石書店  
齊藤司（2017）「吉田新田の開発と近代都市横浜」横浜 Vol.57 31-34  
財団法人横浜市ふるさと歴史財団（2009）『開港 150 周年記念 横浜 歴史と文化』有隣堂  
渋沢史料館編（2016）『渋沢栄一と清水建設株式会社』渋沢史料館  
清水建設株式会社ホームページ <http://www.shimz.co.jp/index.html>  
富川洋（2016）『横浜を創った人々』講談社エディトリアル  
横浜開港資料館（2014年）『横浜のあゆみ 第2版』横浜市ふるさと歴史財団  
『横浜歴史散歩ガイドブック』2016年7月第二版・限定版、横浜市ふるさと歴史財団・横浜市歴史博物館・横浜開港資料館・横浜都市発展記念館  
横浜市神奈川区役所（2012）『神奈川宿歴史の道 [改訂版]』  
横浜市歴史博物館『横浜の波止場』近現代通史展示解説シート  
宮本又郎（2015）『商都大阪をつくった男 五代友厚』NHK 出版  
東京商工会議所ホームページ <https://www.tokyo-cci.or.jp/>  
宮本又郎（2016）『渋沢栄一 日本の近代の扉を開いた財界リーダー』PHP 研究所  
横浜開港資料館（2007）『図解 横浜外国人居留地』有隣堂



横浜市歴史博物館 (2006) 『吉田新田ができるまで』 横浜市歴史博物館

横浜市ふるさと歴史財団 (2009) 『横浜 歴史と文化』 有隣堂

日本郵船歴史博物館入館時配布パンフレット

日本郵船歴史博物館 (2005) 『日本郵船歴史博物館 常設展示解説書』 日本郵船株式会社

川澄哲夫 (2005) 『黒船異聞 - 日本を開国したのは捕鯨船だ』 有隣堂

訪問した歴史博物館・企業博物館

大阪企業家ミュージアム

大阪取引所

渋沢史料館

東証アローズ

生麦事件参考館

日本郵船歴史博物館

横浜開港資料館